

機関番号：12301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20791721

研究課題名（和文）乳児をもつ父親の育児観

研究課題名（英文）The childcare concept of father who have infants

研究代表者

牧野 孝俊（MAKINO TAKATOSHI）

群馬大学・医学部・助教

研究者番号：50389756

研究成果の概要（和文）：

平成 20 年間からの 3 年間で全国 11 ケ所かつ父親 48 名を対象とした。その結果、乳児をもつ父親の育児観として 1,355 記録単位が抽出され、64 コード、21 サブカテゴリーが作成された。最終的に、乳児をもつ父親の育児観となるカテゴリーは、①【子どもとは、生活のリズムの中で触れ合う時間を増やし、自己表現を受け止めながら、成長を見逃さないように、一緒に成長したいという思い】、②【自分の父親のように、仕事・子育てにかかわりたいという思い】、③【子育てにより、今まで気づかなかったことを理解でき、父親として成長していきたいという思い】、④【母親の大変さを理解し、コミュニケーション・援助・リフレッシュをさせたいという母親への思い】、⑤【父親の代わりはいないため、家庭を優先し、夫婦が平等にかつ同じ価値観で一緒に子育てしたいという思い】の 5 つが作成された。今後、父親の支援に関して母親の概念ではなく、今回得られた父親独自の視点によって構築された育児観によって検討される必要があると考える。

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：父親、育児観

1. 研究開始当初の背景

父親が育児に参加することを奨励する風潮が強くなってきていることは、核家族のため母親が育児の援助を求めることができるのは父親しかいないこと、出産後も働く女性が増えたこと、女性の意識変化によって旧来の男女の性役割分業意識が薄れたことなど、社会の変化と無縁ではないと窪（1995）が報告している。また、現在子育て真っ最中の世代が産まれた頃、「夫は外で働き、妻は家庭

を守るべきである」という考えに対し、男性も女性も 8 割以上の方が「賛成」と答えていた（総理府、1972）。つまり、現在子育て真っ最中の父親が子どもの頃、まだ家庭は女性が守るべきものという常識があったことになる。父親が育児に関わる必要性について、青木（2004）は父親の育児不参加による子どもの成育の大きな影として、拒食・過食症などの摂食障害、不登校や引きこもりなどを報告している。また、神原（2006）は虐待予備軍である保護者の実態として、虐待の傾向は

夫婦関係や子育てに対する夫の協力度、子育て不安との関連が高いと報告している。これらのことから、父親が母親の助手にとどまっているだけでは全く足りず、母子関係とは別に父親独自の父子関係を形成することが必要であると考え。このため父親は「もう 1 人の母親」ではなく、「もう 1 人の男親」として育児に関わる必要があると考える。

小児看護領域の看護業務基準（日本看護協会、1999）の中の 1 つに、家族の自責・育児への不安・ストレス・育児困難が生じないよう調整することを援助としてあげられている。しかし、現状において家族の一員である父親は、母親側から捉えられた概念で育児不安を考慮されることが多い。また、今後父親の育児が増加することが予測されるため、父親の自責・育児への不安・ストレスに関して母親の概念ではなく父親独自の視点によって構築される必要があると考える。なぜなら、夫婦の育児に対する思いには違いがあること（上田ら、2005）や育児ストレスの内容が異なること（宮本ら、2006）が報告されている。また、育児不安に関する先行研究において父親が対象である件数は母親が対象である件数の 10 分の 1 に過ぎない（石田ら、2006）と報告しているためである。

これらのことから、現在の父親は育児に関して社会的期待を受けているが、実践の父親モデルを持っていない状況である。この父親を対象とした研究において、育児に関わる必要性が論じられているが、父親がどのような育児観を持ち育児しているか、また育児観と育児不安・育児ストレスなどとの関連は論じられていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳児をもつ父親の育児観を明らかにすることである。

3. 研究の方法

1) 対象者

乳児をもつ父親

2) 条件

- ①調査の同意が得られる。
- ②面接の内容を IC レコーダーに録音すること、また個人が特定されない方法で研究論文に掲載されることに協力が得られる。

3) 方法

- ①乳児健診や予防接種のために、保健センターに来所された乳児をもつ父親に対して調査に対する同意を得る。
- ②当日または後日、保健センター内の一室または群馬大学医学系研究科母性看護学演習室または対象者の自宅のいずれかで、対象者の希望する場所で面接を実施する。また、面接は対象者が妻や家族

に気を遣うことがなく自分の気持ちを自由に話すことができるように対象者と研究者の 1 対 1 で面接を行う。

4) 分析方法

- ①面接終了後、IC レコーダーから逐語録を作成し、内容分析を行う。

5) 面接内容

- ①あなたは、あなたのお父さんをどのようにイメージしていますか？
- ②あなたはどのようなお父さんになりたいですか？
 - ・あなたの理想のお父さん像をお聞かせ下さい。
 - ・あなたはご自身をどのようなお父さんだと感じていますか？
- ③あなたのお子さんに対する世話について 3 つ聞かせてください。
 - ・お子さんのお世話はどのようなことをされていますか？
 - ・普段行っておられるお子さんのお世話であなたが努力されていることをお聞かせ下さい。
 - ・お子さんのお世話において、夫婦間でのどのような役割分担をなさっていますか？
- ④あなたはお子さんに社会のルールをどのように教えていきたいですか？
- ⑤あなたの奥様に対することについて 3 つ聞かせてください。
 - ・奥様とお子さんのお世話に関する相談や助言をされていますか？
 - ・奥様とお子さんのお世話について話合っていますか？
 - ・奥様とお子さんのお世話の大変さを理解しあっていますか？

6) データ分析方法

- ①面接内容をフィールドノートに記載し、許可の得られた場合のみ、面接内容を IC レコーダーに録音する。
- ②逐語録に起こした後、i 子どもの世話、ii 子どもの社会化、iii 母親への援助について表現されている面接内容を記録単位として抽出した。また抽出した文節は個別性が高く、個人特定の可能性があるため、そのままデータ化せずに、意味内容の類似性に従って抽象化してからデータ化した。その後データは、Bereison, B の内容分析を用いて、意味内容を比較しながらカテゴリー化した。分析の過程は、信頼性を高めるために複数の研究者によって行った。

4. 研究成果

1) 対象者

全国 11 ケ所で協力頂いた対象者は 48 名であった。対象者の年齢は、22～44 歳で平均 32.7 歳であった（図 1）。また、初めての子

どもをもつ父親と2人以上の子どもをもつ父親の割合は、24名ずつと同じであった。さらに対象者の職業は、会社員26名、公務員13名、医療福祉系4名、自営業4名、学生1名であった(図2)。

本研究の対象者の平均年齢は、父親の第1子誕生時の平均年齢として報告されている31.6歳とほぼ同様の年齢であった。

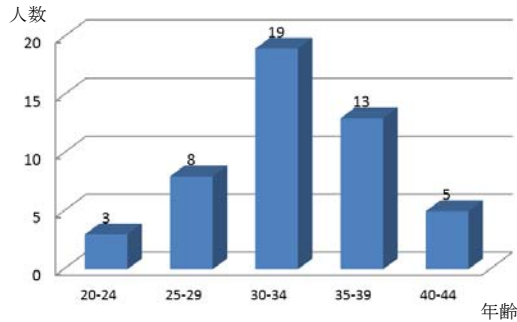


図1 年齢の分布

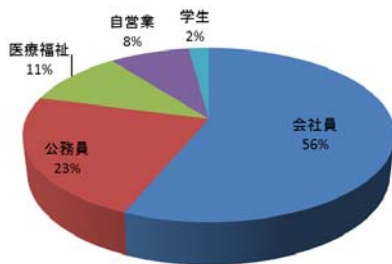


図2 職業の分布

2) 乳児をもつ父親の育児観を構成する5つのカテゴリ

対象者48名のデータから乳児を持つ父親の育児観は、1,355記録単位が抽出され、64コード、21サブカテゴリが作成され、最終的に以下の5カテゴリが作成された。

- ①【子どもとは、生活のリズムの中で触れ合う時間を増やし、自己表現を受け止めながら、成長を見逃さないように、一緒に成長したいという思い】
- ②【自分の父親のように、仕事・子育てにかかわりたいという思い】
- ③【子育てにより、今まで気づかなかったことを理解でき、父親として成長していきたいという思い】
- ④【母親の大変さを理解し、コミュニケーション・援助・リフレッシュをさせたいという母親への思い】
- ⑤【父親の代わりはいないため、家庭を優先し、夫婦が平等にかつ同じ価値観で一緒に子育てしたいという思い】

以下、カテゴリ(【】で示す)ごとに、結果と考察を記述する。

(1) 【子どもとは、生活のリズムの中で触れ

合う時間を増やし、自己表現を受け止めながら、成長を見逃さないように、一緒に成長したいという思い】

このカテゴリは、夫婦の役割は決めず、仕事を調整し子どもの生活リズムの中で触れ合う時間を増やすことによって、子どもの日々の成長発達を幸せや癒しのように感じ、仕事などを頑張ろうとする思いや、父親も一緒に成長したいという思いを示した。カテゴリの構成は、5サブカテゴリ、25コードに統合された457記録単位である。カテゴリに含まれる記録単位数は、全体の33.7%を占め、最も割合が多かった。

今回の結果は、小玉(2009)が子育てをした方が、人生が充実すると感じている若い父親が増加しているという報告の裏付けとなると考える。また高瀬(2005)は、育児の共同化意識のある人ほど育児行動をしていることが明らかになったと報告している。

このことから、育児における共同化意識は、対象者である父親の育児行動を促進する要因と考えられるため、父親に対して共同化意識を促進できるように支援する必要性が示唆された。

(2) 【自分の父親のように、仕事・子育てにかかわりたいという思い】

このカテゴリは、自分を育ててくれた有難みや尊敬を感じている自分の父親のように仕事優先になる思いや子育てに対しても積極的に取り組みたいという思いを示した。カテゴリの構成は、4サブカテゴリ、9コードに統合された204記録単位である。カテゴリに含まれる記録単位数は、全体の15.1%を占めた。

自分の父親のように仕事や子育てに関わりたいということは、西沢(1994)が報告している虐待を受けて育った親が親になった時に自分の子どもを虐待するようになるという現象と関連があるのではないかと考える。

このことから、国外で先駆的に組み込まれている虐待の父親のリスク要因として、仕事・子育て・虐待の世代間伝達について把握し、父親の支援を検討する必要性が示唆された。

(3) 【子育てにより、今まで気づかなかったことを理解でき、父親として成長していきたいという思い】

このカテゴリは、今まで以上に自分の父親や他に子育てで悩んでいる父親の気持ちや母親の大変さを理解できたこと、子どもが定額するまでは触れるの

が怖かったが、優しさや親しみのもてる父親として積極的に子育てに取り組み子どもと一緒に成長したいという思いを示した。カテゴリーの構成は、4 サブカテゴリー、11 コードに統合された 221 記録単位である。カテゴリーに含まれる記録単位数は、全体の 16.3%を占めた。

鈴木ら (2008) は、育児休暇取得中の父親を対象とし心理変化を検討した報告で、生後 1 ヶ月で「子育ての苛立ち」「自尊心の低下」「孤独感」だったものが、生後 11 ヶ月では「子育ての自信」「子どもと母親の結びつき」「子育ての協力的体制」と変化することを報告している。

このことから、子育ては、葛藤や悩みがあるが、かかわっていくことにより自信や周囲との協力へ変化するため、母親のお手伝いとしての子育てではなく、父親が積極的に子育てできるように支援する必要性が示唆された。

(4) 【母親の大変さを理解し、コミュニケーション・援助・リフレッシュをさせたいという母親への思い】

このカテゴリーは、出産や子育て、家事の大変さを理解し、母親の負担やストレスを軽減するために、コミュニケーションを図ったり、子育てや家事を行うことで負担を軽減したり、リフレッシュできるような支援をしたいという思いを示した。カテゴリーの構成は、5 サブカテゴリー、11 コードに統合された 249 記録単位である。カテゴリーに含まれる記録単位数は、全体の 18.4%を占めた。

石橋 (2002) や牧野 (1982) は、夫婦の会話時間と育児不安には有意な関連があり、コミュニケーションが充実しているほど、母親の不安度が有意に低いと報告している。また、良好な夫婦関係は、母親だけではなく父親の育児ストレスの緩和にも効果的であることが明らかにされている (宮本、2006)。さらに、現代の育児不安に必要な支援は、父親の育児参加であることが明確になったと報告されている (上野ら、2010)

このことから、父親が母親の大変さを理解し、話し合いを行うことによって家族周期の意向をスムーズにするかかわりができ、かつ母親の育児不安軽減につながると考えられる。そのため、育児不安の介入として、母親だけではなく家族である父親も対象とし、母親とのコミュニケーション・子育てや家事などの支援・リフレッシュを促進すると共に、良好な夫婦関係が形成できるように支援する必要性が示唆された。

(5) 【父親の代わりはいないため、家庭を優先し、夫婦が平等にかつ同じ価値観と一緒に子育てしたいという思い】

このカテゴリーは、仕事と違い家庭では父親の代わりがないため家庭を優先したり、夫婦が平等にかつ同じ価値観で積極的に子育てできるようにしたいという思いを示した。カテゴリーの構成は、3 サブカテゴリー、8 コードに統合された 224 記録単位である。カテゴリーに含まれる記録単位数は、全体の 16.5%を占めた。

高瀬 (2005) は、育児の共同化意識のある人ほど育児行動をしていることが明らかになったと報告している。自国が子どもを産み育てやすい国かどうかという調査において、否定的な意見をもつ韓国と日本を、肯定的な意見をもつ国と比較すると合計特殊出生率が低い水準である (小室、2007)。また、就職活動の際に、子育てをしながら働ける職場であるか否かを考える男性がいることも報告されている。

このことから、育児における共同化意識は、対象者である父親の育児行動を促進する要因であるため、父親に対してワークライフバランスや共同化意識を促進できるように支援する必要性が示唆された。特に、父親が子育てと仕事を両立できる社会や企業の風調へ変化させる取り組みの必要性が示唆された。

3) まとめと展望

これまで父親の支援を検討する際には、子育てや家事の協力度、母親への援助のみが検討されてきた。しかし、本研究により乳児をもつ父親の育児観として、①【子どもとは、生活のリズムの中で触れ合う時間を増やし、自己表現を受け止めながら、成長を見逃さないように、一緒に成長したいという思い】、②【自分の父親のように、仕事・子育てにかかわりたいという思い】、③【子育てにより、今まで気づかなかったことを理解でき、父親として成長していきたいという思い】、④【母親の大変さを理解し、コミュニケーション・援助・リフレッシュをさせたいという母親への思い】、⑤【父親の代わりはいないため、家庭を優先し、夫婦が平等にかつ同じ価値観と一緒に子育てしたいという思い】の 5 つがあげられた。そのため、今まで検討されてこなかった①夫婦の共同化意識を促進できるような支援、②虐待の父親のリスク要因として、仕事・子育て・虐待の世代間伝達について把握、③父親が積極的に子育てできるような支援、④母親とのコミュニケーション・子

育てや家事などの支援・リフレッシュを促進すると共に、良好な夫婦関係が形成できるような支援、⑤父親に対してワークライフバランスや共同化意識を促進できるように支援に取り組む必要性が示唆された。

今後は、看護師が父親に対して行うサポートや指導などの育児支援のあり方を父親の視点から検討する必要があると考える。また、次世代育成支援対策の目標の一部である父親のワークライフバランスを支持・検討するため、男性の育児休業取得率や職場環境を検討する必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

- ①牧野孝俊、金泉志保美、伊豆麻子、田村恭子、佐光恵子、父親の育児に関する研究動向と今後の課題、第 57 回日本小児保健学会、2010. 09. 17、新潟コンベンションセンター (新潟県)
- ②牧野孝俊、乳児をもつ父親の育児観、第 49 回日本母性衛生、2008. 11. 06、シェラトン・グランデ・トーキョーベイ・ホテル (千葉県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 孝俊 (MAKINO TAKATOSHI)

群馬大学・医学部・助教

研究者番号：5 0 3 8 9 7 5 6